

# 専制君主の純愛



篠伊達 玲

illustration

甲田 イリヤ



専制君主の純愛

《立読み版》

篠伊達 玲

イラスト 甲田 イリヤ

「ここ、ですか……?」

大きくて立派な家ばかりが並ぶ、瀟洒な街の奥の、更に奥。

「ええ。こちらが静階家のお屋敷でございます、千郷様」

黒塗りのベンツの助手席に座る老紳士が答えるよりも、アイアンの門扉がひとりでに開くほうが、わずかに早い。

「こちらには、普段は次期ご当主の亮介様が、おひとりでお住まいになっていらっしゃいます」

「おひとり? ご両親は住んでいらっしゃらないんですか?」

「現在のご当主の旦那様と奥様は、長期でご不在になることが多いのですよ」

静階家の次期当主だという男性の、代理の人。

この老紳士をそう紹介してくれたのは、病室のベッドに横たわっていた父さんだ。

深松さんと初めて会ったのは、紅葉が色づく少し前。

昔、母さんが若い頃に働いていたというお屋敷の次期当主様が、お前の身を案じて使用人として引き取ってくれる……深松さんが帰ったあとの病室で、父さんはそう言っていた。

二度目に深松さんと対面したのは、同級生たちがセンター試験を受けていた日、父さんの通夜の席だ

った。

今日、老紳士は三隅<sup>みすみ</sup>さんという男性の運転する車で、僕を迎えに来てくれた。

初めて会った日に、深松さんから渡された次期当主様の写真は、今、僕の手にある。

ご両親と一緒に映っている写真の中で、これから会う僕の雇い主は穏やかに微笑んでいる。

今日までの間に、この写真の中の彼に向かって、何度「ありがとうございます」とお礼を言ってきたことか。

でも今日からは、現実の彼にお礼が言える。

写真の中で微笑んでいる僕の雇い主は、すっきりとした顔立ちのハンサムな青年だ。

性格の穏やかな人っぽい印象があるのは、優しい微笑みのせいだろうか。

色々と想像は膨らむけれど、どれも現実感がなくて、ピンとこない。

——実際の彼は、どんな人だろうか？

期待と緊張に、胸が高鳴る。

けれど、美しく整えられた前庭を車窓から眺めていると、緊張も徐々に和らいでくる。

玄関の前で、ベントは静かに停車する。

車から降りて振り返った僕は、改めて花盛りの前庭に目を奪われた。

花が散ったあとの、みずみずしい葉を繁らせた桜の巨木。

たくさんの蕾と、いくつかを鮮やかに開かせているバラの花。

植物に大して詳しくない僕の知らない花や木もある。

黄色い花をつけた低い木もあれば、花のない濃い緑の繁み、小さな花が無数についているのか、白い猫のしっぽのように見える花の木、パンジーを入れた寄せ植えもある。

「千郷様。恐れ入りますが、そろそろ中へお入りに……」

——あつ。また、だ。

使用人として雇われたはずの僕を、深松さんは、まだ『様』付けで呼んでいる。

実際にお屋敷で働き始めれば、代々この静階家に勤めている深松さんは大先輩。

そして僕は、先日高校を卒業したばかり、まだ未成年のヒョッコ子だ。

どうにも居心地が悪くて、すでに何度か『様』付けをやめてほしいと頼んでいる。

けれど「承知いたしました」と答えたはずの深松さんは、結局『様』付けをやめてない。

「お庭をご覧になりたいなら、あとでお好きだけご覧ください。千郷様のご到着を、亮介様は首を長

くしてお待ちですから」

深松さんが僕を促し、玄関扉のドアノブに手をのばす。

僕の新しい生活が、ここから始まろうとしていた。

「亮介様、お待たせいたしました。千郷様をお連れしました」

僕をリビングへと案内した深松さんが、室内にひとりでいた男性の背中に声をかける。

さつき僕が見惚れていた前庭を、僕とは違う角度から眺めていた長身の男性は、深松さんの声にゆっくりと振り返った。

「ご苦労だったな、深松、三隅」

僕の前と後ろで、空気が動く。

雇い主のねぎらいの言葉に、三隅さんも深松さん同様に軽く頭を下げたらしい。

——このひとが、僕の雇い主か。

すつきりと整った顔立ちと、醸し出す雰囲気の上品さ。

黙って立っているだけでも、いかにも育ちが良さそうなあたりは、写真のままだ。

深松さんからは、僕より8歳年上だと聞いている。

ご両親と並んで撮った写真よりも、実物のほうが目の力も強くて、いきいきとしている。身長が高くて、手足も長い彼に、目が吸い寄せられる。

束の間ぼーっと見惚れていた僕は、深松さんに「千郷様」と呼びかけられて我に返った。

「こちらが当家の次期ご当主、静階亮介様です」

——いけない、つい見惚れてしまった。

僕を雇ってくれる人だというのに、気を悪くしなかつただろうか。

ごくたまに、ぼーっと見惚れてしまう人がいる。

悪い癖だ、と自分でも思う。

なぜなら、相手はいつも男性だからだ。

どういう訳か、女性には今みたいに見惚れたりしたことはない。

じろじろ見たつもりはないけど、失礼なくらい凝視してしまったかもしれない。



ダメだなあと心の中で呟こぼいて、気を引き締める。

(それにしても、このひとを、何てお呼びすればいいんだろう？ 深松さんと同じように、亮介様ってお呼びしていいのかな？)

たとえば、旦那様、とか……ご主人様とか？

「ようこそ、千郷」

「はじめまして、十河千郷とがわと申します」  
名乗りながら、深々と頭を下げる。

下げた頭を、いつ、上げればいいのか。

相手が『雇い主』というだけなのに。

この間まで、ただの高校生だった僕は、単純なことにもまごついてしまう。

「このたびは、あの、いろいろとお世話になりました、ありがとうございます」

何度も何度も写真に向かって言ってきたお礼を、やっと本物の彼に言うことができた。

今日からは、彼が僕の雇い主だ。

でもその前に、深松さんに僕の手助けをするよう命じてくれた。

おかげで、病院での支払いから告別式、アパートを引き払う手続き、市役所や生命保険の会社への届け出など、どうしたらいいのかわからなくて困ることは、全部、深松さんに相談した。

「今日から一生懸命働きますので、どうぞ、よろしくお願いいたしますっ」

「顔を上げなさい、千郷。さあ、顔を見せて」

命令し慣れた声がして、肩に優しく手が置かれる。

そこに強い力が加わったわけじゃない。

彼の手が、ほんの少し肩を押し上げただけで、自然にお辞儀から解放される。

「静階亮介だ。父親は違うが、君の兄だよ」

にこやかに微笑んだ彼の腕が、僕の身体を不意に抱き寄せる。

爽やかな草原を彷彿とさせる香りが、ふわりと僕を包み込む。

「あ、の……、兄、って……?」

——今、そう言ったように聞こえた……んだけど。

聞き間違えたかと思って、不安になる。

母さんはもちろん、父さんや深松さんからも、そんな話は聞いていない。

「ずっと、千郷をこうしたかったんだ」

独り言かと思うほど小さな声に、ドキンツと、胸が高鳴る。

彼の行動にも、言った内容も、意味は分かる。

だけど、一体何を言ったのか、実感として内容を把握しきれない。

——僕は、どうしてドキドキしているんだろう。

いきなり兄だなんて言われたから？

(それとも、急に抱き締められたせい？)

頭の中に浮かんでいることが、まとまらない。

ただ黙って抱き締められる以外、何もできない。

「亡くなる前に連絡をくれた君の父さんには、心から、感謝する」

しみじみと呟いた彼の腕の力が、ぎゅっと強まる。

戸感っている僕の背中に回されている彼の右手が、スツと片方だけお尻まで下がる。

背中にある彼の手に、更に力を感じる。

お尻まで下がっていた指が、より強く押し付けられて……。

(えっ? あ、あれっ? ……揉んで、る?)

お尻にある手が、まるで感触を確かめるみたいに、もにゅっ、もにゅっ……と動いた気がしたのは、気のせいだろうか?

「千郷、もう大丈夫だからね」

優しさと親しみに満ちた声と共に、抱擁が解かれ、温もりが離れていく。

——考え過ぎ、かな?

彼の顔に浮かんでいる笑顔に、不審なものは見当たらない。

首をかしげた僕の手から、彼はスポーツバッグを取り上げる。

そばに控えていた運転手の三隅さんにそれを渡すと、彼は「さあ、おいで」と、リビングの入り口に突っ立っていた僕をソファへ導いた。

「今日からは、ここが千郷の家だよ。兄弟二人、仲良くしようね」

「あ、あのっ。……その、兄弟っていうのは? 僕は、ここへ使用人として雇っていただいたはずじゃないんですか?」

「うん……? ああ、そうだった。深松には、俺から話すと言ってあったな。千郷が来ると思うと嬉し

くて、すっかり忘れていたよ」

驚かせて悪かったねと続けながらも、楽しげに笑っている。

彼の手は隣に座らせた僕の太ももの上に落ち着いていて、当分、動きそうになかった。

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

専制君主の純愛

《立読み版》

発行日 2011年5月27日

著者名 篠伊達 玲

イラスト 甲田 イリヤ

発行所 【MILK-CROWN】

株式会社水晶院

<http://www.milk-crown.net/>

(C) Rei Shinodate 2011

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。